

17 「熊野観心十界曼荼羅」を読む — 熊野古道の信仰

〈4コマ〉

かとう
加藤みち子

中村元東方研究所専任研究員
学習院大学・青山学院大学非常勤講師



[日 時] 5月5日(土) 13:30~15:00, 15:20~16:50
5月6日(日) 10:30~12:00, 13:30~15:00

[テキスト] レジユメ配布

小山靖憲『熊野古道』(岩波新書) 2000年
豊島豊『熊野信仰の世界』(慶友社) 2013年

[受講料] 5,800円

(早割 4,800円 ※4月28日までに受講料を納入された場合)

紀伊半島にある「熊野古道」は、熊野三社とよばれる神社への参詣道です。「紀伊山地の霊場と参詣道」が、世界文化遺産に指定された2004年以降、年々熊野古道を訪れる人が増えていますが、熊野にはどんな神さまが祀られているのか、熊野信仰とはどのようなものかについては、よく知られていないようです。

本講義では、熊野信仰を広めた熊野比丘尼が、「絵解き」をしたことで知られる「熊野観心十界曼荼羅」というマンダラ図を手掛かりに、熊野信仰とはどのようなものであるか、読み解いていきたいと思えます。

第1回：「熊野観心十界曼荼羅」とはどんな絵か—六道輪廻と閻魔大王

大きな画面にいろいろな内容が描きこまれている「熊野観心十界曼荼羅」ですが、図像内容としてもっとも有名なのは、地獄や六道輪廻の図像です。いわゆる閻魔大王も描かれています。1時間目は、絵の全体の中で、特に閻魔大王とはどのような存在か、六道輪廻とはどのような世界観であるかをみていきます。

第2回：「十界」のマンダラである理由—救済のモチーフの発見

2時間目は、この図が単なる「六道輪廻図」や、「地獄絵」とは異なり、「十界図」であることに注目します。この図の中にちりばめられた、お釈迦様、お地蔵様、観音様などの「救済」のモチーフについて、経典のエピソードとともにご紹介していきます。

第3回：「老いの坂」図と熊野の山岳信仰—修験道絵画という視点から

本図の上部には、「虹のかけはし」とか「老いの坂」とよばれる図があります。図像の下のほうに描かれる六道輪廻図とは異なり、老若男女が歩いている図像です。3時間目は、この図がいったい何を意味しているのか考えます。修験道の「霊山マンダラ」という視点でみていくことで、熊野信仰につながる、この図像の意味が浮き彫りになります。

第4回：真ん中の「心」という文字は何を意味するか

4時間目は、この図の真ん中に描かれる「心」という文字に注目します。ここで、なぜこの図が、「観心」の「十界曼荼羅」と呼ばれるのかが分かります。なお、この図の、「心」から飛び出す「十界」というテーマが、江戸時代の庶民信仰にどのような影響をあたえているかを紹介して、熊野信仰の日本の思想や文化への影響をまとめます。